

仲道郁代 ベートーヴェン 鍵盤の宇宙 第1回「誕生」(2013.12.17)

仲道のトーク、スライドを交えながらのショパン連続演奏会に続く、ベートーヴェンの全ソナタほかを6年間12回のコンサートのなかで網羅する壮大な企画1回目。前半は、ベートーヴェンの象徴となり最後のピアノソナタ3番と同じハ短調であるシンボリックな作品であるとの解説のあとに「ドレスラーの行進曲による9つの変奏曲」と「3つの選帝侯ソナタ2番へ短調」。後半は、ハイドンに献呈された作品2の3曲。3作品12楽章の全てにおいて新たな試みに挑戦したベートーヴェンの熱意を熱く語った後、重厚な音響、対照的な軽快で繊細な音色を楽章ごとに楽しませてくれた。特に3作品のなかでスケールの大きい第3番は、ピアノ協奏曲に匹敵するような作品と自ら説明するように、奥行きのある濃厚な響き、管楽器の明朗な響き、洗練された構成感で本人が納得しながら演奏しているのが伺えた。初心者も専門家も楽しめるベートーヴェン企画である。(12月17日、しらかわホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第403回定期演奏会 (2014.6.14)

ガイアシリーズ第3弾、副題は「水―波に翻弄される舟」。名誉客演指

揮者のテイエリー・フィッツシャーの得意とするラヴェルの『海原の小舟』

から、風のように軽やかに始まった。今回のハイライトのひとつである

プロコフィエフの野性的なエネルギーで溢れる『ピアノ協奏曲第3番』

は、第8回浜松国際ピアノコンクールで第1位に輝いたイリヤ・ラシユ

コフスキーにより、卓抜したテクニックとドラマチックな表現力で演奏

された。アンコールは、対照的な、繊細な響きのモンポウの前奏曲二短

調を演奏。今後の活躍が期待される。後半のメインは、シュミットの『交

響曲第4番』。冒頭の半音階的進行で不安定な表情のトランペットの主題

が展開され、叙情的なチェロの旋律を挟み、トランペットの主題が回想

される様は、川の流れを感じるような流麗な演奏であった。最後は、ラ

フマニノフの『ヴォカリーズ』の切ない旋律を透明感のある好演で聞か

せた。(6月14日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

石川馨栄子ピアノリサイタル (2015.2.14)

2002年デビュー以来、名古屋を中心に定期的にリサイタルを開催し、精力的に活動しているピアニストの石川馨栄子。今回のプログラムは、組曲、変奏曲、練習曲という小品が集まった形式による作品に焦点をあてる。最初のバッハの「フランス組曲大5番」は、華麗で生き生きとした響きで奏で、ホール残響音が交錯しチェンバロのような音色を生み出していた。続くベートーヴェンに影響を与え、モーツァルトにしてはめずらしい短調の『ソナタ第14番』のあとに、同じハ短調のベートーヴェンの『自作主題による32の変奏曲』は、壮大で劇的な展開をうまく構築した。最後は、ショパンの『12の練習曲作品25』。个性的かつ技巧的な一つ一つの小品を研磨させ、全体を通した作品として構築する能力を必要とする意欲的なプログラムであった。アンコールは小品2曲。軽快で華やかな演奏により、民族的でリズムカルなフェアリアの『恐怖の踊り』で終えた。(2月14日、ザ・コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第430回定期演奏会 (2015.12.12)

「メタ」シリーズ「日本民謡の昇華」は、常任指揮者ブラビンスによる英国作品集で、日本の民謡調の旋律を駆使したホルスト「日本組曲」

から始まる。2作目は、名フィルコンポーザー・イン・レジデンスで、

イギリス在住の作曲家、藤倉大への委嘱新作「フルート協奏曲」。5つの

部分で、フルート、ピッコロ、コントラバス、バスの4本のフルートの

特徴を生かし、息、声、倍音などの複雑な音響がオーケストラと美しく

織り交ざる。珍しいコントラバスは、カデンツァの部分を繊細な音色で

奏でる。終演後、クレア・チェイスにより演奏された藤倉の「リラ」は、

この作品の素材を生かしたコントラバスと管フルートの作品で、協奏

曲でも効果的であった下降グリッサンドなどを含み、両作品とも藤倉の

作品を理解した素晴らしい演奏であった。後半の大編成の「惑星」は、

愛知県立芸術大学女性合唱団も加わり、7曲の味を生かした演奏で魅了

した。(12月12日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第432回定期演奏会 (2016.2.20)

「メタ」シリーズ「物語の再編」は、名フィルと3回目となる指揮者、ロリー・マクドナルドの切望したチェコの作曲家による作品特集で、ヤナーチェクの歌劇「利口な女狐の物語」組曲から、ミステリアスな民族的な旋律で始まる。様々な場面の凝縮されたマツケラス編の組曲は、豊かな音色で物語を語った。次のマルティヌーの「オーボエ協奏曲」では、バイエルン放送響の注目の若手首席オーボエのラモン・オルテガ・ケロを迎える。オーケストラにとけ込むような透明感のあるオーボエの暖かい音色で始まり、2、3楽章のテクニカルなパッセージや郷愁を誘う抒情的な旋律を含んだソロの部分は多彩な音色で観客を魅了した。アンコールには、バッハの「無伴奏チェロ組曲2番」からジークを華麗に奏でる。最後のドヴォルザークの「交響曲第8番」は、金管楽器の不安定なバランスに気になるところがあったものの、緊迫感のある熱演であった。

(2月20日、愛知県芸術劇場コンサートホール) (伊藤美由紀)

セントラル愛知交響楽団 第146回定期演奏会 (2016.3.4)

今回の公演は、チャイコフスキーの2作品に焦点をあてる。前半は、『ピアノ協奏曲第2番』。この作品を何度もヨーロッパで指揮してきたレオシュ・スワロスキー、第1番をセントラル愛知と共演した経験があるピアニストの務川慧悟、この2人のチャイコフスキーのピアノ協奏曲への深い理解と解釈による演奏であった。2楽章は、今回のジロティ編曲ではヴァイオリンとチェロの二重奏がカットされているが、ピアノトリオの箇所は、抒情的な美しい響きで観客を魅了した。ピアニスティックな華やかな技巧、重量感をもったこの作品を、自分の世界観で巧みに表現し観客を虜にしたパリ在住の若手ピアニスト務川の今後の国際的な活躍が期待される。アンコールは、リストの『愛の夢3番』。後半は、『交響曲第6番・悲愴』。スワロフスキーによる絶妙な音響バランスとテンポ感による緊張感のある熱演により、この名曲を飽きる事なく堪能することができた。(3月4日、しらかわホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第434回定期演奏会 (2016.4.16)

名フィル創立50周年開幕は、音楽監督・小泉和裕の就任披露公演から始まった。「基本の重視」と「指揮者とオーケストラは家族」をテーマにより選曲されていた。前半は、ベートーヴェンの『交響曲第4番』。古典的なスタイルが確立され、均整がとれ洗練されたこの作品を、丁寧に磨き上げ、明朗で音響のバランスが研ぎすまされた、緊張感のある演奏であった。後半は、R・シュトラウスの4管の大編成による『家庭交響曲』。切れ目なく演奏される単一楽章で、家庭の各々の人物の特徴を描写するテーマが、全体を通して様々な楽器や形を変え登場する。各々の楽器の特徴的な音色がバランスよくオーケストラに反映され、後半の金管楽器の跳躍やハイピッチの多用されている華やかなクライマックスでも、各々の楽器の役割が、歯切れのよい快活な演奏で堪能できた。新音楽監督を迎えて、指揮者、奏者全員の気迫が感じられ、今後の進展が楽しみである。(4月16日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)